

白石和夫先生 ご退職にあたって

石井 勉

白石和夫先生は高等学校でのご勤務を経て、32年前に本学にご着任された。それ以来、幾何学やコンピュータの領域の講義をご担当するとともに、数学教育を中心に研究活動に取り組み、様々なご活動に従事されてきた。

一概に幾何学とコンピュータを担当するとは言いが、2つの領域において専門的な見識を有する上に、相応の研究業績を具える必要がある。しかし、これは並大抵のことではない。これぞまさしく「余人をもって、代え難い」先生である。

先生はお名前の通り、和やかなお人柄で知られ、同僚はもちろん、学生からも広く慕われる存在である。議論の際には同僚の話に耳を傾け、学生指導の際にはご自分の考えを押し付けることなく、粘り強く答えを見つけるプロセスを温かい眼差しで見守る姿が印象的である。

数学専修では、入試問題の作問は大きな業務であり、何より優先される一大事である。その際に、学習指導要領の改訂に合わせて、指導内容の移動や削除、新設などは勿論、教科書の記述の変更など、様々な入試問題作問上の留意点がある。先生は高等学校での勤務経験があったせいか、学習指導要領の改訂にお詳しく、長年の作問経験もあって、入試問題の作問の全体をリードする存在である。

公務として専修主任、学部教務委員会委員長、教育研究所主任、情報処理センター主任、情報処理センター長を歴任されるなど、なくてはならない存在である。特に学部教務委員と情報処理センター主任を長く勤められ、カリキュラムに関する疑問や情報処理科目の運営に関する諸問題に、丁寧に受け答えをされる姿が印象に残る。

先生は本学教育研究所主任として、高校生向け公開講座「大学をのぞいてみよう」や現職教員向けの講習会を企画された。また、文部科学省が主導するサイエンスパートナーシッププログラムでも現職教員向けの公開講座を実施されるなど、地域社会へも深い学識を背景に広く貢献された。

また、数学教育での利用を目的に、JIS Full BASIC規格準拠BASIC処理系“十進BASIC”の開発に取り組みました。その成果の一部は、計算を数学学習に活かすための試みとして、著書に紹介されている。

学会活動としては、数学教育学会の理事等を歴任し年会の運営を担われるとともに、学会課題Study Group「Society 5.0に対応できる文理融合の学校数学の構築と教員養成・研修の試み」代表として、報告書を刊行され、数学教育学会の研究部長を務められた。また、日本数学教育学会出版部において、日数教「YEARBOOK」全6巻、「算数教育指導用語辞典」の第3版～第5版の出版に携われた。

これまで振り返ってきたように、白石和夫先生は数学専修にとって、そして本学にとって必要不可欠な存在である。この度のご退職を迎えて、残される者として不安に包まれながら、深く残念に感じ入る次第である。せめて先生の新しい旅路の充実とご健康を祈願するものである。

(いしいつとむ 文教大学教育学部学校教育課程数学専修主任)

